

前回までのあらすじ

街の中心部では〈ルイン〉が猛威を振るい、外縁部では大量に発生した〈ブレケース〉との防衛戦が続くオオミヤ・シテイ。

一方、流遠やみひめとツバキ・タカチホ、そしてカグツチは、仮想空間で世界中の〈ジエネレーター〉を説得する事に成功する。

〈ルイン〉のエネルギーは世界中の〈ジエネレーター〉から強制的に供給されたもので、それを遮断された〈ルイン〉は弱体化し、その悪意によって発生した〈ブレケース〉もまた同様に弱体化した。

戦局に希望が見えた時、やみひめ達は最後の行動に移る。

やみひめはサクヤヒメと共に〈ルイン〉の深層部分に潜り、ハイデマリーの救出を試みる。

そして、ツバキは〈ルイン〉との戦闘を援護するため、通常空間に復帰する。しかし其処は〈ヤミヒメ〉の操縦室^{コックピット}で、ツバキは操縦席に座るアサトにお姫様抱っこされる形となる。

※『これまでの機獣少女ゾイカルやみひめ』は[こちら](#) (YouTube に移動します)

※登場人物紹介は[こちら](#)

ゾイカルやみひめ-結-

オオミヤ・シテイ外縁——北西方面。

残存していた〈プレケース〉をすべて殲滅し、生き残った〈機獣少女〉達のほとんどが、その場に座り込んでいた。

その光景に、年頃の娘がはしたない——と眉を擡める者はいない。誰もが疲れ果て、すぐにでもベッドに潜り込みたい心境だった。それはアエラ・カートライトも例外ではない。

規格外の敵と戦うための規格外な装備——今は脱ぎ散らかした衣服のように地面に散らばっているMBジャケット〈フェンサー〉を眺めながら、ある種の達成感を感じてはいたが、やはり疲れて何も考えられなかった。

超巨大機獣〈ルイン〉を止めるための切札として投入された〈BO作戦〉。

続けて、補給と僅かな休息を挟み、押し寄せる圧倒的な数の〈プレケース〉との防衛戦に参加した。

本日デビューの新人がこなす予定ではありえない。

「……………」

今頃になって、念願の〈機獣少女〉として戦えた実感が湧いてくる。

同時に、事の重大さを改めて理解した。無意識に考えないようにしていたのかもしれない。下手に考えてしまえば、責任に押し潰されてしまっていたかもしれないから。周囲からは肝が据わっていると思われがちだが、アエラとてまだ十五歳——普通の中学三年生の少女なのだ。

（期待に応えられなかった……）

〈BO作戦〉——残された戦力で道を切り開き、アエラの〈フェンサー〉に装備された超大型ランスで〈ルイン〉を一点突破する作戦は失敗に終わった。

初陣だからとか、敵が強大すぎたなどと言いつつ訳するつもりはない。ただ、期待に応えられなかったのが悔しい。

「——ライカ!?」

アエラが忸怩たる思いを抱いていると、隣にいたバニラ・イカルガが声を上げた。肌の露出が多いアンダースーツ姿のアエラと違い、MBジャケットを解除したバニラは私服姿である。〈フェンサー〉は急拵のため、通常のMBデバイスのように待機状態となる機能が実装されていないのだ。

「……天国かな。女神がいる」

目を覚ましたライカ・ユズキは、心配そうに自分を見下ろしている少女に向けて、やや冗談めかして言った。瞬間的に戦闘力を向上させる〈レイジ・システム〉を使い、鬼神の

如き活躍で多くの敵を屠り、多くの味方を救った彼女は、システムの終了と共に電源が落ちたように意識を失った。

「馬鹿！ また無茶をして……どれだけ心配させれば気が済むんですか、あなたは？ 嫌がらせですか、もう？! 本当に……馬鹿なんですから——」

自分の膝を枕ひざにしている友人ライカに向けて、涙ながらに罵声を浴びせるバニラ。少し前までは冷静な戦況分析と正確な狙撃で、アエラ達を援護してくれていた狙撃手スナイパーとは思えない。

バニラとは親戚の間柄で、その友人であるライカ共々、アエラは姉のように慕っている。これからもずっと、彼女はこんな風にライカの世話を焼いて、振り回され続けるのだろう。

(……これからも——)

アエラの脳裏に嫌な疑問が浮かぶ。

自分達に『これから』があるのか。

世界中から集まっていた〈プレケース〉は殲滅したが、市街地の〈ルイン〉は未だ健在の**はず**。荷電粒子砲の増幅装置兼偏向レンズである『輪』は、すでに衛星軌道上に到達しているだろう。今や人類の生存圏すべてが〈ルイン〉の射程に入っているも同然だった。

ちらと視線を走らせると、意識して見ないようにしていた光景がアエラの視界に入る。

其処には十数名分の〈機獣少女〉の亡骸なきがらが集められ、戦いの熾烈さを物語っていた。特に状態が酷いものには衣服が被せてある。本当なら全員の顔を隠してやりたいが、毛布もビニールシートもこの場にないのが現状だ。

「……………」

自分もあの中に加わっていたかもしれない。そして数秒後は判らない。もし〈ルイン〉の荷電粒子砲が頭上から降り注げば、死体すら残らない。

理不尽な死を想像し、アエラは紅い空を見上げた。どういった現象なのか、まるでフィルターがかかったように、少し前から世界は紅く染まっていた。

アエラ達から程近い位置で、リツ・ミナトはMBジャケットを解除し、負傷した足の具合を確かめていた。傍らでは後輩のモカ・カワイが不安そうな表情を浮かべている。

戦闘中に彼女を庇ったのが原因なので、申し訳ない気持ちもあるのだろう。

「——え？」

患部に違和感を覚えた。痛みがないのだ。

「ど、どうしたんですか……?」

「なんともないわ……」

心配するモカに、リツはやや戸惑い気味に答えた。自力で歩けてはいたので、たいした怪我^{けが}ではないと思っていたが、痕跡すら残っていない。最初から怪我などなかったように。

「もう治ったんでしょうか?」

「さすがに早すぎるでしょ」

だとしたら異常な回復力だ。ただ、モカにはああ言ったが、その可能性をリツは否定しきれなかった。〈ヒナミ総力戦〉より帰還してから、〈機獣少女〉としての力が増したように感じていたから。

そして、それはモカにも同じ事が言えた。自覚はしていないようだが、オオミヤ・シテイを脱出した時——正確には〈ヒナミ総力戦〉より帰還してからもかもしれないが、モカも戦闘力が向上しているようにリツは感じていたのだ。

「——心配してほしくて大袈裟^{おおげさ}に言ってたんじゃないの?」

思案しているリツの背後から、心ない言葉が投げかけられる。もつとも、軽口のもりで悪意はないのだろう。構ってほしくて言っているのだと今なら判る。

「もう、〈グングニル〉さん! リツ先輩はそんな事しませんよ」

「そうよ。パイセンじゃないんだから」

地面に『大』の字になって脱力しきっている自称〈グングニル〉こと、キリエ・ソウマを振り返り、モカとリツは口々にそう言った。

「私だっじゃないわよ!?!」

がばっと身を起こし、瞬時にテンションが最高潮^{マックス}に達するキリエ。かなり消耗していたはずだが、すでにだいぶ回復したようだ。

「……………」

そういえば、キリエもオオミヤ・シテイ脱出の際から行動を共にしているが、〈機獣少女〉としての実力には内心で感心していた。元々、特定の層からは支持されていたようだが、言動に問題がなければ、もつと人気が出ていただろう。それこそ、あの^{カナコ・シンクウジ}〈戦姫〉や^{ツバキ・タカチホ}〈難攻不落〉のように。

「……ちよつと。なによ、その残念なものを見るような目は!?!」

「ていうかパイセン、なんで当たり前のように私達の近くにいろわけ?」

周囲には激戦を生き延びた〈機獣少女〉達が何十人といて、散り散りだが、数人単位で固まっている。ほとんどが無言で力尽きているが。

「リツ先輩、それは……」

「あー、察し。そっか。うん、やっぱりそうよね」

モカが言い淀んだのに対し、リツもまた具体的な内容は口にしない。言わんとしている事は十分に伝わっているだろう。以前にも本人に言ったが、キリエの性格では友人を作るのは難しいだろう。特に同じ《機獣少女》に対しては対抗心が強いので、親しい者は皆無だと思われる。

つまり——キリエに《機獣少女》の友人はいない。

あくまでリツの予想だが。

「……………リツ先輩、あの——」

「なによ、モカ」

ちよつと意地悪がすぎたかもしれないと、キリエの様子を窺おうとしたところに、控えめに袖を引かれた。なぜか声も控えめだ。

「《グングニル》さんが……」

「え？ なんなのよ」

心なしか非難するような目——普段は子犬のように従順だ——をモカから向けられ、少しだけ嫌な予感がある。恐る恐るキリエの方を振り返ると——

「……………うう……ぐすっ……ひっく……」

自称《グングニル》ことキリエ・ソウマ——ガン泣きである。

「うーわ……。ちよ、パイセン。泣かないですよ……」

「泣いてないわよっ!?!」

せめてもの抵抗なのか、顔を隠さず、涙を拭こうともしないが、キリエが強がっているのは明白だった。

「《グングニル》さん！ 私達、友達ですよ！ ね、リツ先輩！」

「え……………」

「せ・ん・ぱ・い……………」

「あ、はい」

モカの意外な迫力に気圧され、思わず敬語になってしまった。

「そうよ、パイセン。私達、ずっと友達——ズッ友でしょ」

「うるさいわよ!?! 死ねばいいのに……………っ!?!」

精一杯の作り笑顔を浮かべるリツに、キリエは顔を涙でくしゃくしゃにしながら怒鳴った。

キリエの怒鳴り声を遠くに聞きつつ、二人の飛行型〈機獣少女〉が地面に降り立った。
「決まりました！ 今日ロゼちゃん、見事な着陸です！」

「……馬鹿」

ロゼ・レオーネとヴィオレ・モンターニュである。

〈L. C. ファクトリー〉のロゼット・コダールからの依頼で、文字通り飛び回っていた二人は、この周辺で防衛戦を行っていた〈機獣少女〉達にメッセージを伝え、そのまま彼女等を援護した。そして戦闘終了後、念のためにと周囲を上空から見回ってきたところだ。

「まだ元気が余ってる奴等やつらもいるな」

「……あの小学生くらいの子、私が〈嵐の刃ストーム・ソード〉で助けた子だわ」

「マジか。無駄撃ちしなくて正解だったな」

「無駄撃ちしようとしたのは、あんたでしょ」

〈ルイン〉の荷電粒子供給ファンを撃ち抜くため用意された、希少金属製レアメタルの刃を撃ち出す

〈嵐の刃ストーム・ソード〉だが、高い対空迎撃能力によって作戦は破算となった。そのため、ロゼは景気よく使ってしまったおと——ヴィオレを励ますための軽口だったのかもしれないが——提案したのだ。

「まあ、それはそれとして」

「誤魔化したわね」

「そーれーとーしーてー」

「あー、はいはい。なに？」

露骨に話題を変えようとするロゼに、ヴィオレは嘆息たんそくした。

「これからどうする？」

「そうね。とりあえず私達も休憩しましょう。またロゼットから指示があるかもしれないし」

理由は不明だが、世界中から東方大陸に集結していた〈ブレイクス〉は、その多くが姿を消した。強い『絶望』の感情に惹ひかれて現れるという噂が一部で広まっているらしいが、それが本当なら、〈ブレイクス〉を呼んだ絶望が消えたのだろうか。

（この状況で絶望しなくなる人がいるとは思えないけど——）

「ヴィオレ？」

考え込んで足が止まっていたらしい。先に進んでいたロゼが振り返り、不思議そうに此方こちうを見ている。

「なんでもないわ」

出所も不明の、ただの噂だ。考えても仕方がない。
消えてしまった〈ブレケース〉よりも、今考えるべき問題は別にある。最大の脅威である
ヘルインは未だ健在なのだ。



オオミヤ・シティ市街地——中心部。

しかし其処は大規模な破壊によって、すでに市街地と呼べる状態にはなかった。
車道も歩道も大小様々な瓦礫が散乱し、ほとんどの建造物が倒壊している。荷電粒子砲
の照射によって消し飛んだり、地面が抉れている場所も多い。

東方大陸の最大都市は、もはや戦場跡地と化していた。

否——戦いはまだ終わっていない。

高層建築物がなくなった戦場に、巨大な異物が屹立している。

この惨状を引き起こしたものだ。

突如、オオミヤ・シティの地下から現れた超大型の機獣。

ヘルインである。

撃破する事はおろか、足止めが精一杯だったその全高六十メートルあまりの巨体は、し
かし今、縛めによって自由を奪われていた。

ヘルインの周囲に発生している三つの『円』。表面は水面のように揺らいでいて、異次
元にも繋がっているのか、そこから二本の腕と一本の尻尾を現出させている。どの部
位にも見覚えがあり、機械のような多関節の腕には、鉤が備わっていて、それがヘルイ
ンの両腕を拘束し、やはり機械のような多関節の尻尾の先にある砲身を、『動くな』と
言わんばかりに鼻先に突きつけている。

人間であればお手上げ——ホールドアップするしかない状況だ。

「――」

動きを封じられたヘルインを見上げ、カナコ・シングウジは直前の出来事を思い返し
た。位置を補足され、荷電粒子砲を撃たれると覚悟した時、虚空から現出した件の腕と
尻尾に救われたのだ。

そこに得意顔で現れたのは十二単のようなぞろつとした和装の妙齢の女性——サク
ヤヒメだった。

見覚えがあるのも当然だ。件の腕と尻尾はサクヤヒメの本来の姿で、その『本体』は虚
空に発生している『円』の向こう側にあるのだろう。

機獣でありながら人間の姿となり、規格外の能力を扱う……古代種というのはどこまで出鱈目なのか。

(出鱈目なのは、これも同じね)

左腕に装備されている防御兵装〈ヤタノカガミ〉に視線を落とす。〈カタストロ〉との戦いでは、まず使う事のない無用の長物と思っていたが、サクヤヒメによってカナコも知らない機能が解放された。制限のようなものがかけられていたらしい。通常であれば^{きりよくあ}機力で編んだ防壁を展開するのだが、先の使用時には、世界を照らすかの如き^{まばゆ}眩い光を發した。

(あの光が収まってから、気持ちが軽くなった気がする。これがサクヤヒメの狙いだっただの……?)

〈ルイン〉と接触してから、嫌な感覚がずっとあった。まるで濃厚な悪意に晒^{さら}されているかのような、知らずに気持ちが病んでいくような、そんな感覚だ。

先の光には、そういったものを^{ほら}祓う効果があったのかもしれない。

「——ねえ、クラウ。今のうちに、ちよっとイタズラしちゃってもいいかな？ いいよね……っ?！」

「だ、駄目だよ、邪魔しちや。集中してるのかもしれないし……」

〈ルイン〉の動きを完全に止め、カナコに〈ヤタノカガミ〉を使わせたサクヤヒメは『やる事がある』と言って、^{ろく}碌な説明もせず、その場で^{まごた}瞼を閉じて沈黙していた。アヤカ・シユバイツァーはそんな彼女にちよつかいを出そうとし、クラウ・P・ブランはそれを阻止しているようだ。

「大丈夫、痛くないから！ 先つちよだけ！ 先つちよだけならいいよね?！」

「指だよね?！ 指でつつくとか、そういう意味だよね?！」

「やだ、クラウってば！ そういう意味じゃないなら、どんな事すると思ったの?！ どんなイケナイ想像しちゃったの?！ 是非その口から聞かせて?！ その綺麗な顔で恥じらいながら言っつて?！ そういうのも嫌いじゃないわっつていうかむしろ好き……っ!!」

「へ、変態?！」

「いいいいよっしやああああああああああああ！ ありがとうっごさいます!!」

罵倒されて喜ぶ趣味があるらしい。クラウに変態と言われて悶^{もた}えているアヤカを、カナコは無言で見つめた。

「そのゴミを見るような軽蔑の眼差し……最高よ」

カナコの視線に気付いたアヤカが、恍惚の表情を浮かべつつ言った。趣味・性癖は個人の自由なので、特に他意はなかったのだが、無意識に嫌悪感が表情に出ていたようだ。

だが、それすらもアヤカにとっては『「褒美」だったらしい。

「そういえば、二人にはちゃんと挨拶も出来てなかったよね。今更だけど——アヤカ・シユバイツァーよ。十五歳のぴちぴち現役女子中学生じゅうせいねんなんで、そこそこよろしく！
嗚呼ああっ、素敵あかなお姉様方がた!!」

唐突まぐに捲まし立て、あたかも当然の流れであるかのように抱き着こうとしてきたアヤカに対し、カナコは無言のまま脳アイアン・クロー天締めで迎撃した。片手で相手の視界を塞ふさぐ要領で顔を驚おどろかし、後は指に力を込めるだけの簡単な技である。この際、相手の身体からだを持ち上げられるとより効果が増すのでオススメしたい。

「あだだだだだだだだだ……っ!? ちよ、カナコ！ 痛い！ メリメリ言ってる！
食い込んでるからあああ——ッ!?」

「私、『お姉様』じゃないんだけど……」

アヤカが悲鳴を上げる中、その後ろでぼつりと呟つぶやくのが聞こえた。容姿と落ち着いた零囲気から同世代だと思いがちだが、たしかクラウは流遠るしおやみひめと同級生——つまり小学生だったはずだ。

「……………」

「——な、なに?」

無言で視線を向けられたためか、意図が判らずクラウが動揺する。

(小学生……兄さんはロリコンじゃないと言っていたけど、本当なの?)

最愛の人——橘たちばな アサトの周りには小さな女の子が多い。ラブホテルで一夜をすごしたのに何もされなかった件もあるため、カナコは彼のロリコン疑惑を捨てていなかった。ちなみに『兄妹だから』という発想はない。

「あの、そろそろシユバイツァーさんを——あっ!?」

真っ先に異変に気付いたのはクラウだった。

「——っ!?」

「へ? な、なに……!?」

カナコも咄嗟とつぱに身構え、急に脳アイアン・クロー天締めから解放されたアヤカも状況を理解したようだ。
だ。

サクヤヒメによる〈ルイン〉の拘束が解かれようとしていた。



〈ルイン〉が鎮座する位置からは、やや離れた倉庫。

其処そこに身を潜めるオオカミ型の機獣（ヤミヒメ）。その頭部にある操縦席コックピットにツバキ・タカチホは唐突に——いた。正確を期きすなら、その搭乗者たちばなである 橘 アサトの膝ひざの上に乗っていた。いわゆる『お姫様抱っこ』の状態に近い。

「……………」

この狭い空間でアサトと密着している。近い距離に顔がある。

なんだ、この状況は？

なぜ彼に『お姫様抱っこ』されているのだ。緊張と混乱で冷静な思考が働かない。

「えっと……ツバキ、だよな？」

アサトが困惑気味に口を開いた。彼も動揺しているらしい。その様子を見て、状況を理解出来できていないのが自分だけでないと知り、ツバキは少しだけ冷静さを取り戻した。

「は、はい。そうです。此処ここは機獣の方のやみひめさんの中……で、いいんですよね？」

この機獣が友人の流遠るとおやみひめの並行世界での姿——ツバキからすれば地球の方が並行世界なのだが——なのだと言われても、未だいまに実感が湧わかない。

「ああ。戻ってきたんだな……よかった」

ツバキの返事にほっとしたのか、アサトは彼女の頭にぼんと手を乗せ、優しい表情を浮かべた。

「あ……」

アサトが無事を喜んでくれている。それが嬉しくて、ツバキは撫なでられるまま、軽く身を預けた。

（橘たちばなさん——）

彼の心臓の音が聞こえる。少し鼓動が早くなった気がするのは、自分を意識してくれているからだろうか。

（だとしても、それは……）

これ以上はいけないと自制心が働く。

なにより、冷静になって今すべき事を思い出した。（ヤミヒメ）のコア・ルームに入り、〈カグツチ〉の——ややこしい表現だが——仮想人格と再会した。そのまま仮想空間を通じて、やみひめと共に世界中の〈ジェネレーター〉のコアと、代表者を通じて対話をした。間に入ってくれたアニスに続き、サクヤヒメが現れ、そして——

「——私、もう行きますね。やみひめさんはまだコア・ルームの中なので、ちゃんと護もつてあげてください」

念を押すように強めに言うと、アサトは一瞬きよんとしたが、すぐに見慣れた物憂ものうげな表情を浮かべた。彼の表情筋は長続きしないらしい。

「ん、判った。本当に役に立ってるのか微妙だけど、もうちょっと座ってるよ」

「——必要だと何度も言っています」

自嘲気味に答えたアサトの背後から、不意に会話に参加する声が聞こえた。

「私もツバキのように膝に座れば、アサトに信じてもらえるのでしょうか」

淡々とした声が続く。心なしか拗ねているように聞こえなくもない。

複座である事を完全に忘れていた。たしか紅桜という名の少女が乗っていたはずだ。

(橘さんとの会話、聞かれてた……!?)

途端に恥ずかしさが込み上げてくる。同時に、やみひめに対する後ろめたさも……。

「それよりもツバキ、そろそろ出番のようです」

「え? ——っ!?!」

紅桜の言葉に反射的に外を見ると、視界の先——もはや戦場跡と化した市街地に鎮座する〈ルイン〉の拘束が解かれようとしていた。



サクヤヒメが〈想刻の間〉——やみひめ達のいる仮想空間を訪れる少し前。

カナコによって運び込まれた病室のベッドに座り、〈スティングー〉と呼ばれた古代種の化身は自己修復機能をフル稼働させていた。

〈ハメツノマジユウ〉——人間からは〈ルイン〉と呼ばれている超巨大機獣によって、背中から串刺しにされ負った傷だ。カナコに救われねば、あのまま絶命していただろう。

(妾としたことが、飼い犬に手を咬まれるとはな)

〈ハメツノマジユウ〉の行動は、失った動力源の代わりとして喰らった、別の世界の機獣の影響だろう。どういった出自かは知らないが——興味もない——ティラノサウルス型の大型機獣は多くの場合、脅威として恐れられる存在だ。

(奴もまた、〈ハメツノマジユウ〉を変質させる——いや、制御を奪ったと見るべきか。それだけの力を持っていたのじゃろう)

この世界に呼び出された際も、従うふりをして、機会が訪れるのを待っているのかもしれない。結果、〈ハメツノマジユウ〉に喰われはしたが、その力を手に入れた。搭乗者は並外れた野心家であり自信家だったのかもしれない。

「——さて、どうしたものかの」

あえて声に出したのは、単なる気紛れだった。人間は頭で考えるだけでなく、思った事を言葉にして気持ちを整理するらしい。今の姿でなら、人間の真似事をするのも一興

かと思ったのだが、そう都合よくはいかないらしい。

「……ハイデマリよ——」

ハイデマリ・I・エイミス。

天才故の欠落を抱えた悲劇の少女。

サクヤヒメに名前をくれた。その孤独な魂に惹かれた。助けたかったのに叶わなかった。それが今、〈ハメツノマジユウ〉の中にいると判明した。

助けようと言ってくれた二人の〈機獣少女〉——やみひめとツバキの提案を受け入れるべきだったのではないか？

カナコも言っていた。サクヤヒメの行動を、ハイデマリはどう思っているだろうと。

「……………」

途方に暮れて天井を見上げる。無論、答えが書いてあるはずもない。

「これが人間か。なんともはや、実に難儀なものじゃの……」

この身体で過ごしてみて実感した。人間の思考の、なんと複雑怪奇な事か。この瞬間まで、意図して考える事を放棄してきた。自分の行為に疑問をもってしまわないように。

だが、もう遅い。どうしたいのか、どうするのが最善なのか、判らない。

サクヤヒメは完全に思考の円環に陥ってしまった。

(……………何用じゃ)

不意の呼びかけ。

機獣が持つ意思疎通手段で、ある種の念話である。無視する事も出来たが、今は気晴らしが欲しかった。

┌————┐

(これは『無言電話』とかいう嫌がらせか?)

実際に電話という通信手段を使った事はないが、恐らくはこういうものだろう。

(すまない。呼びかけておいてなんだが、こうも素直に応じてくれるとは思わなかったの
でな)

相手がサクヤヒメをどう認識しているかが、よく判る反応だ。もともと、仕方ないと思う程度の自覚はある。

通信を送ってきたのは〈アニマルペス〉。

サクヤヒメと同じ、悠久の時を生きる古代種の生き残りである。

(して、何用じゃ? 改めて旧交を温めようというお誘いかの?)

前回はお互い人間の姿で対峙し、最終的にサクヤヒメの缺が〈アニマルペス〉の胸から背中を貫いて終わった。あの時は今生の別れになると思っていたが、そこは同じ

古代種、こうして生きていても驚きはない。

「――頼みがある」

サクヤヒメの皮肉を受け流した上に、その一言には相も変らぬ生真面目さに輪をかけて真摯な態度が感じられた。

(……………聞こう)

(状況は把握している。これは汝にとっても悪い話ではないはずだ)

それから〈アニマウルペス〉の話聞いたサクヤヒメは無人となった病院を後にし、〈ハメツノマジユウ〉と戦っていたカナコ達と合流し、〈想刻の間〉を通じて、世界中の〈ジエネレーター〉のコアと和解したらしいやみひめ達と接触を果たした。

「――ふう。こういうのを『骨が折れる』と言うのかの？」

「目が覚めたようね」

サクヤヒメが仮想空間から現実に戻ると、カナコが首だけで振り返って言った。臨戦態勢といった様子で、その左右にいる〈機獣少女〉も同様だ。一人は因縁のあるアヤカ・シユバイツァーだが、もう一人は見覚えはあるが名前は知らない。

(たしか、あの時に〈アニマウルペス〉が身を挺して庇った娘だったか)

今ならば多少は当時の〈アニマウルペス〉の気持ちか理解出来る。ハイデマリーを〈ハメツノマジユウ〉――当時は『四番』と呼んでいた――から救おうと必死だったあの時と、きつと同じだったのだろう。

そして今――こうして目の前にあの『四番』がいる。

「――」

人間の姿で、敵として対峙すると、その巨大さと脅威がよく判る。並の人間であれば、抵抗どころか逃げる気力すら根こそぎ奪われているだろう。しかし、この三人はその限りではないらしい。

「並みでないのがもう一人か――」

此方に向かってくる赤い戦装束の〈機獣少女〉を視界に捉え、サクヤヒメは満足そうに独りごちた。



赤いMBジャケットを身に纏った〈機獣少女〉が、散乱する瓦礫を軽やかに越え、跳

ねるように進む。

ツバキだ。

普段よりも身体が軽い——というより、力があり余っているような感覚だ。持て余しているのではなく、余裕があるというか、機力が矢鱈充実している実感がある。

「……………」

アサトに見送られ、ツバキがMBジャケットを展開すると、そのデザインに変化が生じていた。元々が和装をイメージしたもので、ブラスター・フォームでは弓道着のようだったが、それが今は晴れ着のようなデザインになっている。具体的にはやみひめのMBジャケットの色違いに近い。

「——〈カグツチ〉、簡潔に説明してください」

『ふむ、そうだな……このMBジャケットには、やみひめの力が組み込まれておる。使用方は理解るはずだ』

問いかけに答える機械音声は、これ以上なく簡潔だ。機能についても、確かにまるで取扱説明書が頭に入っているように使い方が理解る。

「もうひとつ。貴女は私の知る〈カグツチ〉ですか……?」

通常は薙刀で、ブラスター・フォームの際は弓のような形態に変わるが、現在は槍となっているMBデバイスに問うた。後で知った事だが、地球からゼヘナに帰還してからの〈カグツチ〉は、やみひめがツバキのために設定した疑似人格だったらしい。それも今は消滅し、本来の人格は機獣である〈ヤミヒメ〉として再起動した。

ならば、この〈カグツチ〉は——

『ツバキにしては愚問だな。今の私は〈ヤミヒメ〉という機獣であると同時に、そなた 相棒であるMBデバイスの〈カグツチ〉だ。それ以上でも以下でもない』

得意げな口調からは、ツバキが相棒である事を誇らしく思ってくれているのが伝わってくる。〈カグツチ〉が今どのような状態であれ、それで充分だ。

『やるぞ、ツバキ。制御は心配するな。思いきりやるがよい!』

「——はい!」

荒れ果てた街に佇む〈ヘルイン〉の巨体を目前に捉えた。ツバキの接近に気付いてはいるようだが、その動きはひどく緩慢だ。

「—————」

コア・ルームに入る前の戦闘で負った足の怪我は、どういう訳か治っている。変化したMBジャケットとMBデバイスにも不安はない。なにより、出来るという確信がある。

だったら——

「(分断するもの)——」

やみひめが使う(機獣少女) 由来ではない特異な能力。今のツバキは、それを使える。託されたのだ

「その威を示せ……っ!!」

(ルイン)の肩に乗り、紅い輝きを宿した右手を頭部に翳すと、手心えのようなものを感じた。まわりついていたら何かを無理矢理引き剥がしたような、そんな手心えだ。

直後、先ほど仮想空間に現れたサクヤヒメが視界に入ると、待っていたとばかりの

獐猛な笑みを浮かべ、ツバキが引き剥がした何かを——噛み砕いた。

実際にサクヤヒメが、その人間としての口内に含んで歯で噛んだ訳ではない。人間の視覚では認識出来ない光景を、脳がそう解釈した——要はイメージ映像だ。

「上出来じゃぞ、ツバキよ」

「は、はあ……」

瓦礫だらけの地面に降り立つと、サクヤヒメに満面の笑みで迎えられた。上機嫌なのは喜ばしい事のはずだが、直前の光景を思うと表情が引き曇るのは致し方あるまい。

「……なんじゃ、その苦笑いは？ 主等もか。はて——？」

続けて姿を現したクラウとアヤカ、そしてカナコも同様に複雑な表情を浮かべているのに気付き、サクヤヒメだけがよんとんとしていた。

「引いてんのよ」

「か、カナコさん！」

耐えかねたのか、ずばり全員の気持ちを代弁したカナコの言葉にも、やはりサクヤヒメは不思議そうな表情を浮かべるだけだった。

「まあよいわ。これで(ハメツノマジユウ)はおとなしくしておるじやろうて」

大雑把なのか興味がないのか、どちらにせよ、サクヤヒメは話を進めるつもりのようにだ。

「ではの」

「えっ、どういう事……?」

一方的に別れを告げるサクヤヒメに、クラウが戸惑う。逃げるような素振りではないため、慌ててこそいないが、アヤカとカナコも同じ心境だろう。

「それは私がお話しします」

仮想空間における(ジェネレーター)のコア達との対話が終わると、そこへサクヤヒメが入室してきた。(ルイン)に囚われているハイデマリーを救いたいという彼女の頼みを聞き、ツバキとやみひめは了承した。そして通常空間に戻ったツバキは、手筈通りに

（ルイン）から制御不能となった原因——捕食したティラノサウルス型の機獣だそうだ——を分断ディバイドしたのだ。

とはいえ、ツバキもぎつくりとしか状況は把握で出来ていないため、三人に上手く説明する自信はない。

サクヤヒメはといえば、軽い身のこなしで（ルイン）の肩まで達すると、やみひめを奪還する際に利用した胸部装甲の破損箇所から内部に侵入するところだった。その先はツバキも足を踏み入れたコア・ルームである。

サクヤヒメは一度も振り返る事なく、その奥へと消えていった。



何もない黒い空間に、やみひめはいた。

機獣のコアの『空き領域』と呼ばれる、データとしては大容量の余剰スペース。そこに形成される仮想空間が〈想刻の間そうこくの間ま〉である。通常は機獣と搭乗者、あるいは機獣同士が意志疎通を行うための場だが、それ以外の者が招かれる場合もある。

ツバキが退室ロケアウトし、カグツチも支援に専念すると言って、この場に残されたのはやみひめ一人だった。

「……………黒い——」

通常であれば、これでもかと言わんばかりのコーデインイトがされた和室なのだが、サクヤヒメに『すぐに戻る』と言われたため、〈シネレーター〉達との対話で使った何もない初期設定の空間ではする事がない。

人間は何もない白い壁の部屋に無音で長時間放置されると、精神に異常を来たすと聞いた事がある。黒い部屋でも同様だろうか。

「——待たせたかの」

「待ったよ！ 気が狂っちゃうんじゃないかと思ったよ！ もう…………っ!?!」

唐突に現れた待ち人に、やみひめは少し涙ぐんで抗議した。

「大袈裟おおげさじゃの。待たせたとはいはしたが、実際には一瞬のはずじゃ」

〈想刻の間そうこくの間ま〉は通常空間と時間の流れが違う。ハイデマリーを救うための準備があるとあって、一度退室ロケアウトしたサクヤヒメが現実で過ごした時間からすれば、彼女にとっては一瞬なのだろう。

「私の体感時間だと五分は待ったもん!」

「…………安心せい。たかだか五分で廃人になどならんわ」

呆れた様子でサクヤヒメは言った。当然だが、やみひめも本気で言っている訳ではない。勝手に怖くなってしまった恥ずかしさと、それを誤魔化するための八つ当たりである。

「……どうなったの？」

「ツバキが上手くやってくれたわ。あの三人も無事じゃよ」

ツバキは通常空間に戻り、ヘルインと戦っているクラウ達も無事と知り、胸を撫でおろす。

「じゃあ、行こうか」

気持ちを切り替え、やみひめが先導するように言う。

「……………そうじゃの」

一転してサクヤヒメの雰囲気为重くなる。職員室に呼び出しをくらった生徒のようだ。

(サクヤヒメでも怖いんだ……)

ハイデマリを救いたい。しかし、彼女がどういう状態なのかすら不明であれば、

躊躇するのも当然かもしれない。会いに行っても、助けられる保証はないのだから。

古代種と呼ばれる超常的な存在であっても、こうして対峙しているサクヤヒメは、普通の人間と何も変わらないように思える。ならば、この先に不安を感じてもおかしくはない。

だから――

「……なんじゃ、この手は？」

不意に握られた左手に視線を落とし、サクヤヒメは不思議そうに訊ねた。

「人間はこういう時、こうして手を握ってあげるの。『大丈夫だよ』『一緒にいるよ』っ

っ」

「ふん。気休めか」

「そうだよ。休まった？」

「……………」

鼻で笑われたが、構わず笑顔で返すと、サクヤヒメは暫し無言でやみひめを見つめた。恐ろしく整った顔に無表情で見つめられるのは、怖いというか独特の緊張感がある。

結局、サクヤヒメの返事はなかったが、握り返してくる手の感触だけで、やみひめには充分だった。

「――行くぞ」

「うん」

景色が変わる。何もない黒いだけの空間が、別の機獣の仮想空間――〈想刻の間〉と繋がった状態になったのだ。これには空間の主である機獣双方の合意が要る。サクヤヒメ

の試みが成功したのだろう。

しかし――

「何もない……」

そう。その空間には何もなかった。黒が白に反転しただけ。壁もなく、見渡す限り白い空間が広がっている。

「――あ」

視界を正面に戻すと、まるで最初からいたかのように、二人の人物の姿があった。車椅子に座っている少女は、やみひめと同年くらいだろうか。両目は閉じられ、眠っているように見える。

〈ルイン〉の記憶で見たハイデマリー・I・エイミスだ。

「――ハイデマリー……っ!!」

繋いでいた手を解き、サクヤヒメが堪らずといった様子で駆け出した。無理もないと思う。このために来たのだから。

「――」

無言でサクヤヒメの前に立ったのは、ハイデマリーの隣にいた人物だ。

幼い。まだ小学校にも上がっていないくらいの年齢に見える。

(あの子が……?)

この場にいる以上、無関係なただの幼児であるはずがない。ハイデマリーの隣にいるという事は、その正体は間違いなく――

「――ッ！ どけ！」

「え……?」

サクヤヒメが一切の情け容赦なく幼児を殴り飛ばした。無論、それ自体もショットキングな光景ではあるのだが、やみひめが驚いたのは厳密にはそこではない。この〈想刻の間〉は、現実で〈ルイン〉の制御を取り返したサクヤヒメによって〈ヤミヒメ〉のそれと繋がった。

つまり、あの幼児は〈ルイン〉の化身であるはずなのだ。それが、こんなにも軽々と殴り飛ばされたりするだろうか。

「……邪魔だ――」

「――」

立ち上がった幼児がハイデマリーを背にする。

サクヤヒメは殴り、または蹴り飛ばす。

そんな事を何度か繰り返すうち、サクヤヒメはハイデマリーまでほんの僅かな距離に

歩を進め、(ヘルイン)の化身と思しき幼児は、ハイデマリーを渡すまいとその膝ひざにしがみついていた。

やみひめにはその光景が、母親を悪漢に渡すまいとする、無力な子供にしか見えなかった。

第四十七話

世界の始まりの日（後編）

自分が何時、何処で、誰によって造られたのか、『ソレ』自身も知らない。名前もない。

『四番』(ハメツノマジユウ)。ヘルイン。それ以外にも様々な呼ばれ方をしてきたが、どれも本当の名前ではない。あつたのかもしれないが、覚えていない。ただ、何をすればいいのかは判る。

『破壊』だ。

破壊して、壊すものがなくなれば眠りに就き、目覚めればまた破壊する。

その繰り返しに理由はない。

意味など求めない。

『ソレ』はただ、そういう存在であり、そう...ものなのだから。



オオミヤ・シテイの地下シェルター。

多くの避難民が身を寄せ、頭上での騒動が過ぎ去るのを願っていた。

「——外来種？」

割り当てられたビニールシートで仕切られた一角で、ロゼット・コダールはアニス——その実体は「アニマウルペス」と呼ばれる古代の機獣——からヘルインに対する推測を聞いていた。

「そうだ。同じ古代種といっても、あれは我や(ステインガー)——いや、サクヤヒメと比べても明らかに異質だ。この星の機獣とは起源が違うと考えた方が納得がいく」

アニスは永い時を、歴代の『ロゼット・コダール』と共に過ごしている。その知識は専門家には及ばずとも、十分に信用に足るものであるとロゼットは知っている。

「……だとしたら寂しいだろうね。知らない星で、たった独りで」

「汝の持論だったな。生物とは完璧でなく、完璧でないからこそ生物である——然りだ」

アニスは淡々と続ける。

「完璧でないもの、『個』として完結していないものは孤独だ。だから他者を求める。それは機獣も変わらぬ。恐らくはヘルインもな」

その言葉を聞き、ロゼットは街で暴れるヘルインの姿が、親を探し泣きじゃくる迷子のように思えた。

オオミヤ・シテイ外縁——南部方面。

タオエン・ファフロウは、〈フレケース〉を殲滅した妹のベアトリーチェに対し、暗示による制限をかけ直していた。

「別にいいのに——」

「よくありません。今回の事で改めて必要だと感じました」

渋る妹に苦言を呈する。力に呑まれる様子はないものの、やはりまだ幼いうちは自分が目を光らせておく方がいいだろう。

「——そちらも済んでいたか。つまらん」

声と共に現れたのはファフロウ姉妹と同じ、魔女のような格好をした娘——長女のヤミヒメ・ファフロウである。

「おつかれさまです、姉さん。物足りませんでしたか？」

「なに、デザートが欲しいと思った程度だ。……なぜ隠れる」

反射的にタオエンの陰に隠れたベアトリーチェに気付き、ヤミヒメが訊ねた。

「だって、なんか殺気立ってるんだもん……」

「ふむ。久々に力を振るったので、まだ昂つていたのかもしれない」

にやりと口の端を上げる長女に、三女はまたも怯えたようにびくりと身を震わせた。

「姉さん」

「……ふん」

タオエンに窘められ、ヤミヒメは少し拗ねるように鼻を鳴らした。

「それより、街の〈ヘルイン〉はよいのか？ もういつそ私が——」

「それでは根本的な解決になりません。そもそも部外者の我々が、必要以上に関わるべきではないのです」

今更かもしれませんが——と、タオエンは内心で呟いた。

「わたし達に出来る事、もうないのかな」

ベアトリーチェがぼつりと言った。

「……………」

ロゼットが『波動』と呼ぶ現象で知った〈ヘルイン〉の記憶。それを聞き、タオエンは仮説を立てていた。恐らく、〈ヘルイン〉は『回線』に接続出来るハイデマリーを仲間だと誤認し、理解するために融合を試みたのではないか。あるいは単純に、孤独を埋めるための行為として。

だとすれば、ハイデマリーを救出し、〈ルイン〉を鎮める余地はあるかもしれない。
 タオエンは〈ルイン〉と接触している最中であろうやみひめに接続を試みた。



車椅子に座る意識のないハイデマリー。その膝にしがみつく、〈ルイン〉の化身である
 う幼児。その光景は、母親を連れていかれまいと泣きつく無力な幼子にしか見えない。

「サクヤヒメ！ ちよつと落ちて着こう！ こんなのは、なんか駄目だよ……!?」

「離すがよい。此奴が見た目通りの童でないのは知っておろう」

更に手を上げようとするサクヤヒメを咄嗟に止めると、予想外に冷静な声音が返ってきたため、むしろ戸惑ってしまう。

「……っ。そうかもしれないけど——」

「……………っち」

短く舌打ちすると、サクヤヒメは幼児を無視し、ハイデマリーに語りかけた。

「ようやく逢えたの、ハイデマリー。とはいえ、妾は主の事をすっかり忘れてしまっ
 ておったのじゃがな」

自嘲気味に笑うサクヤヒメ。この世界は過去に何度も改変が起きている。その度に記憶は再設定され、状況も変化していたが、しかしハイデマリーの事は一度も思い出さなかつたようだ。

「……のう。なぜハイデマリーは眠っておる？」

「——」

「答えぬか！」

業を煮やしたサクヤヒメは声を荒げ、ハイデマリーに無言でしがみついていた幼児の胸座を掴み、その小さな身体を持ち上げた。

「……なんじや、その顔は？」

殴られた痕が痛々しいが、幼児の表情には恐怖も怒りも浮かんでいない。完全なる無である。それがサクヤヒメの神経を逆撫でした。

「——ッ！」

十二単のような和装の両袖から多関節の腕が伸び、先端の鉋が左右から幼児の顔に突きつけられる。

「……己を斬り刻めばよいのか……ッ!?」

激昂するサクヤヒメ。幼児の胸座を掴む手はわなわなと震え、すぐにでも実行に移し

そっだ。

「サクヤヒメ——!」

再び止めようとするが、やみひめは自分の行動に自信が持てなかった。幼い容姿をしているが、相手は人間ではないのだ。サクヤヒメの気持ちを考えれば、止めるのは偽善なのではないか。そもそも、やみひめにサクヤヒメを止める権利があるのだろうか。

そんな風に躊躇を覚えた時だ——

慟哭どうくとしか表現出来ない声が響いた。

幼児の姿からは想像も出来ない怨嗟えんさの叫び。

それは凄まじい圧となって、やみひめとサクヤヒメをこの空間から拒絶した。

(弾き出される……っ!!)

そう感じた直後、やみひめは意識を失った。



それまで穏やかですらあった地下シェルターの状況は、阿鼻叫喚へと様変わりしていた。

一掃されたはずの〈プレケース〉が突如現れ、雪崩なだれ込んできたのだ。その際に数人が犠牲となったが、残っていた〈機獣少女〉が対処し、今は入り口付近まで押し戻していた。

「下がってください!」

「大丈夫、落ち着いて」

「念のため、子供達は奥の倉庫に移動させて!」

後方で避難民に指示を出すロゼット達〈L.C. ファクトリー〉のスタッフの声を背中に聞きながら、アニスは周囲に大量の八角形の板状の障壁バリヤを形成し、〈プレケース〉に対する最終防衛戦を張る。前衛を務める〈機獣少女〉達と連携すれば、これ以上の被害者を出す事はないだろう。

「アイナ、ルイゼ、汝等なんじらは下がれ。もう充分だ」

〈獣王〉——アイナ・ボーグマン。

〈竜帝〉——ルイゼ・ルンシユテッド。

共に東方大陸トップレベルと謳うたわれた〈機獣少女〉だったが、すでに戦う力は残され

ていない。二人が無言でアニスの後方に立っているのは、せめてもの意地なのだろう。

「爆碎拳！ アイアン・フィストオオオッ！」

高らかな叫びを上げ、メカメカしいMBジャケットの〈機獣少女〉が〈ブレイクス〉に
呐喊した。ボクシングの右ストレートよろしく突き出された右手は手首まで敵の体内に
埋まり、そのまま別の個体を数体巻き添えにしなが、一気に入り口から外へ抜けた。
屋外からでも聞こえた「――滅せよ！」の後、勇者はやり遂げた表情で帰還した。

「勝利をこの手に掴むまで、あたしの勇気は死なない――ッ！」

〈バスター・マシン〉ことミズキ・オイカワである。

彼女は機力が不安定になり予備役となっていたが、非常事態につき一時的に〈機獣少女〉
女として復帰していた一人だ。

「ミズキ、ご苦労。外にあと、どれくらいいたか判るか？」

「あ、多分、まだ十体以上はいたと思います。今ので警戒してくれたみたいですけど」
ならば先ほどのように雪崩こんでくる心配はないだろう。

「交代で入り口を固める。絶対に中に入れさせるな」

アニスの指示に、この場にいる〈機獣少女〉達に緊張が走る。無理もない。すでに一線
を離れた者や、外縁の防衛線への参加を拒んだ者達だ。自信がないのは仕方がない。

「気負う必要はない。自分と此処にいる者達を護る――それだけでいい」
多少の間はあったが、アニスの言葉に多くの者が声を上げて応えた。



オオミヤ・シテイ外縁――北西方面

(消えたはずじゃなかったの……!?)

上空を旋回するヴィオレのしかい眼下には、再発生した大量の〈ブレイクス〉を迎え撃
つ〈機獣少女〉達の混戦が広がっていた。

地上だけではない。飛行型の敵もかなりいる。

『いいいいやつほおお――ッ!!』

通信機からテンションの高い声が届く。もう一人の飛行型〈機獣少女〉であるロゼが戦
闘に入ったのだ。こんな状況でも飛ぶのは楽しいらしい。

「――つく」

援護したいが、ヴィオレも教体の飛行型に捕捉されてしまっていた。

空も陸も、誰もが余裕がなかった。

オオミヤ・シテイからの避難民が身を寄せている〈エイミス〉教会施設。

〈ステインガー〉とその幼体が発する生体磁場による通信障害が復旧し、僅かながらオオミヤ・シテイの情報テレビやラジオにも入るようになっていた。

とはいえ、〈ルイン〉は未だ健在。一度は一掃されたはずの〈ブレイクス〉が再び大量発生したという不確定情報もある。

「……………」

スマイレ・ヒノカゲは、現地でも戦っているであろう友人の身を案じた。送り出したのはほんの数時間前のはずなのに、もう何日も経ったような気がする。

「……姉ちゃんの友達、大丈夫かな」

「タカチホさんの事？ なによケンタ、心配してるの？」

弟が自分の友人を案じていたのが意外で、スマイレは少し驚いた。

ツバキ・タカチホはクラスメイトで、最近仲良くなった〈機獣少女〉の友人である。

「べ、別に心配とかじゃねーし！ あんな、おっばい！」

恥ずかしさを誤魔化すためか、逃げ出すようにして部屋を去った弟の背中を見送り、スマイレは苦笑した。



オオミヤ・シテイ市街地——中心部。

カナコ達は再び暴れ出した〈ルイン〉と交戦状態にあった。

サクヤヒメが〈ルイン〉の胸部内——コア・ルームに侵入して暫くはおとなしくしていたが、突如これまでにない凶暴性を発揮し始めた。各所に配置されたレーザー機銃と、口内の荷電粒子砲を狂ったように撃ち続けている。

(それに——)

巻き添えを恐れてか近付いては来ないが、〈ブレイクス〉の姿が散見される。何処から湧いてきたか不明だが、連中を警戒しつつ今の〈ルイン〉の相手をするのは荷が重すぎる。(もう倒すしかない)

ツバキも加わった今の戦力なら可能だろう。サクヤヒメには気の毒だが、ハイデマリー一人のために、これ以上の危険を冒す義理はない。

「――全員へ。もう全力で破壊するかしないと思うんだけど、誰か異議がある？」

荷電粒子砲が明後日の方角に発射されるの見送りながら、カナコは問うた。

『――仕方ないね。こりゃあもう、どうにもならない』

『……………うん』

通信機を介してアヤカとクラウドから回答が届く。消極的賛成なのは、これも仕方がない。

「ツバキも、いいわね？」

「……………」

近くにいたのだろう、ツバキはカナコの隣に着地し、無言でつらそうな顔をした。

彼女はやみひめと共にハイデマリーを救うために動いていた。タオエンの不可思議な能力によって『情報』を『送信』されたカナコは、アサトと共にそれを援護してきたが、これ以上は付き合いきれない。

「無理に答えなくていいわ」

表情で判る。そうするしかないけど、言葉に出来ない。ならば無理に言わせる必要はない。

「アヤカは支援。三人で同時に突入して、突破出来た者が背中をファンを破壊する」

『――あの、タカチホさんは…………？』

クラウド。ツバキの返事がなかったので気になったのだろう。

「ツバキは隣にいる。同時に突入するわ」

『――りよーかい。でもそれ、作戦かなあ…………？』

『――だけど、もう力押しししかないと思う』

これまでは足止めが目的だったため、急場凌ぎの連携で対処したが、破壊するなら細工は要らない。特に今のツバキは、やみひめと同様の力を使える。クラウドもMBジャケツトが別物になっていたし、そもそもアヤカに至っては最初から規格外である。

「それじゃ、攻撃かい――っ!？」

『開始』と言い切る前に身体が動いていた。ヘルインの視線が、もっとも向いてほしくない方角に向かっていたのだ。

「カナコさん!？」

ツバキの動揺する声が背後から聞こえたが、構ってられない。とにかく走る。

ヘルインの口が大きく開き、荷電粒子砲の発射体勢に入った。カナコの様子に気付いた三人が発射を阻止しようとするが、どうしたって間に合わない。

ならば採れる手段は、カナコにはこれしか思いつかなかった。

「――っ」

荷電粒子砲の射線上に先回りし、左腕の〈ヤタノカガミ〉を起動する。

本来の用途である機力で編んだ障壁が展開した直後、凄まじい衝撃と轟音に晒された。視界が眩い光で満たされる。

(兄さん……)

荷電粒子砲の射線上——カナコの後ろには、アサトが搭乗する〈ヤミヒメ〉が身を潜めている倉庫があった。



赤い和装を風に翻し、ツバキは槍へと形態を変えた〈カグツチ〉を構える。

「撃ち砕くもの——その威を示せ！」

先端から撃ち出された紅い光が〈ルイン〉の頭部を直撃する。完全な破壊には至っていないが、外装は消し飛び、内部構造が露出している。

(私のせいだ。私が躊躇ったから……)

カナコは撃たれた。荷電粒子砲には耐えきったが、限界を迎えた彼女は倒れ、〈ヤミヒメ〉に乗るアサトに保護された。安否は不明だ。

「——撃て！」

周囲に紅い光弾を複数発生させ、〈ルイン〉に向かい走りながら、順に撃ち出していく。半数はレーザー機銃によって迎撃されたが、残りは装甲に被弾。表面を焦がす程度だが、気を引ければ充分だ。

〈ルイン〉の背後からは、新たな翼を得たクラウが迫る。両手首の内側から光弾を発射し、迎撃のレーザー機銃を軽やかに躲かしていく。以前の〈ラインハイト〉は白い印象だったが今は黒に変わり、火力と運動性能が底上げされたように感じる。

——ググユイイイイオンッ!

それは咆哮——なのだろうか。

耳障りな金属質な響きを含んだ異音を上げ、〈ルイン〉が尻尾の付け根を覆う装甲を開いた。そこから無数のミサイルらしき筒状の物体が垂直に打ち上げられていく。

ツバキの脳裏を過ったのは、ベアトリーチェが使っていた多弾頭ミサイルだ。敵の頭上で炸裂し、大量のベアリング弾を地上に撒き散らす兵器である。

作動する前に迎撃を——と思った瞬間、〈ルイン〉の放ったミサイルが細い光の線によ

って貫かれ、次々に爆散していく。

光の発射位置を特定すると、監視カメラか望遠鏡のような装置を操作するアヤカの姿があった。彼女の扱う兵器の多様さなら、ひよっとして〈ルイン〉を一撃で殲滅可能なものもあるのではないかと考え、背筋がゾツとした。

「〈両断するもの〉——」

不穏な想像をやめ、やみひめに託された力を行使するのに集中する。この距離なら射程内のはずだ。

「——その威を示せ！」

〈カグツチ〉の先端に長大な紅い光の刃が形成される。幅は約一メートル、長さは〈ルイン〉の全高にも及ぶだろう。

(もう迷わない——！)

極大の得物を振り上げ、ツバキは渾身の力で振り下ろした。

大陸間弾道ミサイル迎撃レーザー・システムを分解し、アヤカは次の得物を手にする。だがそれは、自分のMBデバイスを分解・再構築したものではなかった。

「面白そうだし、使ってみよっかな！」

偶然、瓦礫の中から見つけた巨大な白い馬上槍。〈機獣少女〉が使うものとしては規格外の大きさだが、実に浪漫がある。きっと浪漫が判る技術者が、浪漫たっぷりに造ってしまっただけに違いない。

「だったら、使ってあげなきゃ勿体ないよね……っど！」

アヤカは知らないが、奇しくもそれは〈ルイン〉の荷電粒子供給ファンを撃ち抜くための切札——〈プラスチックホールスピアEXⅡ〉だった。本来は〈フェンサー〉の専用装備だが、装着車のアエラが戦闘中に紛失してしまったのである。

そんな事は知らないアヤカは、件の馬上槍を両手で抱え上げ、〈ルイン〉の足元に吶喊した。与えられた役割は、あくまで援護。

それならば——

「どっせい！」

〈ルイン〉の膝の関節にあるシリンダーの隙間に馬上槍の穂先を突き入れ、

「動け！」

引鉄らしき部位を引くと、穂先が杭打ち機よろしく射出され、更に高出力のプラズマが放出された。そういった機構だろうと予想はしていたが、期待以上の威力と外連だ。

〈ルイン〉の発する悲鳴を聞きつつ、プラズマの効果が収まるのを待つ。

「苦勞さん」

本来とは違う形で役目を果たした〈ブラストホールスピアEXⅡ〉を^{ねざら}勞いながら手放すと、アヤカは後退した。



足元で放電のような現象が起きると、〈ルイン〉の動きが鈍った。上空からは詳細が判らなかったが、アヤカが何かやったらしい。

前方ではツバキが長大な^{バスター・ソード}大 剣 を発生させ、すでに攻撃体勢に入っている。

〈私も——！〉

高度を上げ胸部装甲を展開。両手を前方に突き出し、『道』を作るイメージを浮かべる。背中の^{ウイング・スラスター}羽 根 を広げ、最大稼働状態を示す赤い光の翼を発生させる。

〈プラズマ・スマッシュヤー〉。

腕部のデュアル・クロウ・ユニットによるエネルギー制御で仮想砲身^{バレル}を形成し、展開した胸部からプラズマ・エネルギーを撃ち出す。その際に反動制御を行うため、背部のマルチ・スラスター・ユニットは最大稼働状態にする必要がある。

これが生まれ変わった〈ラインハイト・ライセン〉最大威力の武装である。

——ッ！

クラウの咆哮が^{トリガー}引鉄となり、圧縮された高密度のプラズマ球が発射された。バチバチと青い雷光をまわりつかせ、白と紫のうねりが進む。

ツバキの〈^ザ両断するもの〉とクラウの〈プラズマ・スマッシュヤー〉。

共に極大の一撃が〈ルイン〉を直撃し、その圧倒的なエネルギーが^{あか}紅く染まった世界を揺らした。



知っている人達が見える。

街の外と中で、出現した大量の〈プレケース〉と戦っている〈機獣少女〉達。

アサトを護るため盾になったカナコ。

アヤカの援護を受け、〈ルイン〉に極大の一撃を放つツバキとクラウ。
そして——世界が揺れた。

(どうなったんだろう……)

視界が暗転して何も見えなくなり、音も聞こえない。

カナコは無事なのか。〈ルイン〉はどうなったのか。

何も判らない。

「——そろそろ起きたまえよ、やみひめ」

虚ろな意識の中、自分を呼ぶ声に対し、やみひめは反射的に訊ねた。

「……………誰？」

「ボクはハイデマリーだよ。知っているだろうか？」

「……………」

ハイデマリーは知っている。だが、意識が途切れる直前まで、彼女は車椅子に座り、ずっと眠っているような状態だった。それが今は雑多な研究室のような部屋で、〈ルイン〉の記憶で見た時のように、立って明朗に話している。

「ハイデマリー…………？」

「そうだ。天才美少女・ハイデマリーとはボクの事だ」

ドヤ顔に少しイラっとしたため、意地悪を言ってみる。

「……………言うほど美少女じゃないよね」

「なんだと!? ……そうか、ボクはそんなに可愛くなかったのか——」

自信家かと思いきや、それほど自己評価が高い訳でもないというか、あるいは単純に素直なのかもしれない。ちよっとした意地悪で言っただけなので、ハイデマリーのしゅんとした表情を見て、少し心が痛んだ。

「嘘だよ。ハイデマリーは可愛いと思うよ? 小っちゃいし」

「——なっ?! 失敬だな、こう見えて君より年上だぞ…………?!」

顔を真っ赤にして怒るハイデマリー。容姿については気にしているようだ。〈ルイン〉の記憶で見た時の年齢なら、たしか十五歳のはずだが、高く見積もっても小学六年生のやみひめと同じくらいにしか見えない。

「そんな事より——」

「そんな事とはなんだ! ボクの尊厳に関する問題よりも優先すべき事柄があるという

なら、言ってみたまえ！」

「もー、めんどくさいなあ……」

「めんどくさい!!」

思わず漏れてしまった本音にショックを受けるハイデマリ。

「めんどくさい……そうか、ボクはめんどくさいのか——」

メンタルの浮き沈みが激しい。やや情緒不安定なのかもしれない。

「ごめん！ 冗談だよ」

「……ふふ。いや、いいんだ。気を遣わなくても。自覚はある。こんなだから友達も出来ないよね、判ってはいるのだよ……」

黄昏たそがれてしまった自称・天才美少女にかける言葉を探すが、ありきたりな文句しか浮かばない。そもそも、本気でへこんでいる訳でもないだろうし、下手な励ましは逆効果になるかもしれない。

「——とまあ、冗談はこのくらいにしてだ」

気を取り直すように言っつて、ハイデマリは顔を上げた。

「そろそろ本題に移ろうじゃないか」

ずっとそのつもりだった——という言葉を飲み込む。余計な事を言うと、また話が逸れそかぬない。

「率直に言おう。ボクはこれから世界をやり直す」

普通なら誰もが、イタい中二病だと生温かい視線を送るだろう。(ヘルイン)の記憶を見ていなければ、やみひめも同じように思ったかもしれない。

「それって、世界改編……?」

「改変か。本来と違ったものにするのだから、そういう言い方も間違っつてはいないだろう」

ハイデマリが世界改編に関わっているとは思っていたが、先ほどの口ぶりだと、彼女自身が行っているのだろうか。

「無駄を省くために、君の疑問に先回りしよう。まずひとつ——『やり直し』はボクの意思でやっているのではないよ」

心を読まれた気分になったが、違っだろう。やみひめの表情や状況から、浮かぶであろう当然の疑問を予想したに過ぎない。こういうのは占い師がよく使う技術テクニクだと、テレビの番組で見た事がある。

「ありとあらゆる負の感情——いわゆる『怒り』や『悲しみ』が一定値を超えた時、自動的に実行されるようになってる。これは誰にも止められない」

条件は判った。止める手段がない事も。

「そして、どんな世界にするのかを決めているのもボクじゃない。恐らくだが、無作為^{ランダム}だ。僕が観測する限り、これまでの世界に法則性は感じられなかったからね」

やみひめは無言で聞く。

「最後に——君は今、ボクと意識が繋がった状態にある。『やり直し』の直前に目覚めて、今回の世界の結果を識^しって、また眠る。ずっとその繰り返しさ」

「……………」

「これを最初に言うべきだったかな」

苦笑を浮かべているのは、意図的にそうしなかったからだろう。この順序で言わなければ、せつかくの回答が頭に入りづらくなるだろうと。

「……繰り返し返しても、ハイデマリーはずっとそのままなの？」

『やり直し』の起点になってしまったからね。君も見たんだろ？」

〈ルイン〉の記憶を見た。あくまで印象だが、ハイデマリーが〈ルイン〉の中で願ったから世界改編は起きたように感じた。

恐らくは彼女の〈異能者〉としての能力が、〈ルイン〉に取り込まれたことで、世界改変を起こすほどのものに変化したのだろう。そして、しかしそれを本人は制御^{でき}出来ない。

「さて——ようやく本題だ」

「うん……………」

すでにその事実を受け止めているのか、ハイデマリーの表情に悲哀はない。それがむしろ、やみひめにはつらく感じた。

「君はどんな世界を望む？」

「……………へ——？」

ハイデマリーの問いに間の抜けた声が出してしまった。

「今回が初めての事例だよ。やみひめ——君の好きにしている」

更に言葉を失う。彼女が冗談を言っているようには見えない。

「……すまない。これもちゃんと説明すべきだね。どうも過程をすっ飛ばしてしまっ。天才の悪いところだ」

言葉では悪いと言っているが、口調からは自分の天才アピールだとありありと伝わってくる。

「世界が紅く染まっている現象。あれは君の〈ドラグーン〉としての能力だが、ここに
はひとまず置いておこう」

〈ドラグーン〉とはハイデマリーが造った決戦兵器の機獣だ。やみひめのE.I.アピリ

ティがそれと同じものなら、並行世界の同一存在である〈ヤミヒメ〉は〈ドラグーン〉という事になる。

(そういえばあの時、〈カタストロ〉にも〈ドラグーン〉って呼ばれた……)
地球で最後にツバキと共に戦った時の事だ。

「気付いたようだね。つまり、ある意味でボクは君のお母さんだ。ママと呼んでくれてもいいんだよ?」

「……置いておくんじゃないの?」

「ふふ、照れ屋さんめ」

ハイデマリが余談を戻す。

「平たく言えば、あの現象は君の能力を最大限に發揮させるためのものだ。そこに君の友達が空間を振動させるほどの衝撃インパクトを与えた。その二つが『やり直し』のシステムに影響を与えたのだろう」

「……………」

「その胡乱うろんな目で見るのはやめたまえ。ボクは残念ながら全知全能ではないんだ。すべてを説明出来る訳ではないのだよ」

自称・天才ではあっても、神ではないという事か。

「ともあれだ——今回の『やり直し』は君の希望が叶う。仮にだが、システムに与えた影響が深刻であったなら、これが最後になるかもしれない」

「それって、ハイデマリも開放されるかもしれないって事!?!」

「あくまで『かもしれない』だ。ぬか喜びになるといけないから期待はしないが……そうだね、ボクの幸せもついでに願ってくれると嬉しい」

そう言っつてハイデマリは控ひかえめに笑った。

「だったらさ——」

やみひめの提案にハイデマリは驚きの表情を浮かべ、乗り気とは言えない様子だったが、最終的には「君の好きにするといい」と呆あきれていた。世界を好きにしていると言われた時とは、だいぶ意味合いニュアンスが違ったが、これしか思いつかないのだから仕方がない。

正直に言えば、欲望に塗れた理想の世界も妄想した。例えば、アサトと同年の恋人になって——といったものだが、その程度だ。年の差は努力で埋められないが、それはたいした問題ではないし、相手の気持ちを操作するような事はしたくない。

きつと意味がない。価値もない。

だから——これがやみひめにとっては最善の選択。

「……………うっ——」

赤い非常灯が照らす薄暗い〈ヤミヒメ〉の操縦席で、アサトは意識を取り戻した。はつきりとしらない頭で、直前の記憶を辿る。突然膝の上に現れたツバキを送り出し、一度はおとなしくなった〈ルイン〉が暴れ出した。

(そうだ。その攻撃から俺達を護って……)

アサトは眠るようにして身体を預けているカナコに視線を落とす。

盾となつて荷電粒子砲を受けきり、彼女は力尽きたのだ。すぐに〈ヤミヒメ〉に収容して離脱したが、直後に世界が揺れたような振動に襲われ、今まで気を失っていたらしい。

(夢じゃないんだな……)

眠っているようにしか見えない妹の髪を撫でる。顔が少し埃で汚れている。これでも拭いてやったのだが、生憎と此処には布を濡らす水もウェットティッシュもない。

「……………カナコ——」

物言わぬ骸となつた身体をぎゅつと抱く。

もう、それしか出来る事がない。

外は何も見えない。光が届かないという事は、瓦礫か何かに埋もれている可能性が高い。音も聞こえないが、戦いは終わったのだろうか。

『——えっと……………これを聞いている、この声が聞こえる、すべての人へ』

唐突に聞こえた、アサトがよく知っている——『声』。

「……………やみ子？」

肉声ではないし、通信機を介して聞こえているのでもない。

だがその『声』はアサトのよく知る流遠やみひめのものだった。



『上手く言えないけど、もうすぐ全部が終わるから、終わったら何をしたいか考えてみて』

爆心地のような有様の市街地で、ツバキとクラウドも『声』を聞いていた。

「……ブランさん、聞こえていますか？」

「う、うん。タカチホさんにも聞こえてるなら、幻聴じゃないよね」

『なんでもいい。ちょっとした事でも、すごく贅沢な事でも。幸せな自分を想像して』

地下シェルターで、侵入しようとする〈ブレイクス〉と戦う〈機獣少女〉達の背中を見守るアイナとルイゼにも『声』は届いていた。

「なんなんだ。この状況でこのふざけた『声』は……？」

「判りませんが、この状況でふざけられるのでしたら、たいした度胸ですわね」

『ブレイクス』が現れてから大変な事がいっぱい起きた。大事な人を亡くした人もいるよね』

「アニス、この声ってやみ子ちゃん……？」

「そのようだ。他の者にも聞こえているようだが……何が起きている」

ロゼットやアニスだけではない。地下シェルターに避難した、やみひめと関りを持たない者達にも、『声』は聞こえていた。

『だったら想像して、こ・ん・な・は・ず・じ・ゃ・な・か・つ・た・世・界・を』

再出現した〈ブレイクス〉と混戦状態のオオミヤ・シテイ外縁にも、『声』を聞く者が大勢いた。

「リツ先輩！ この声、タカチホさんのお友達に似てませんか……!?」

「よく覚えてるわね！ モカ、右からも来るわよ！」

『そんなに大袈裟おおげさに考えなくてもいい。妄想や願望でもいいし、理想の世界を想像して』

「有名になりたい！ 〈グングニル〉を定着ていせきさせたい！ 〈戦姫いくひめ〉をぎゃふんと言わ
せたい……！」

「あんなにもすらすらと願望が出てくるとは……この状況では、むしろ感嘆に値する御仁
ですね、バナラ姉様！」

「あれは反面教師にしてください。アエラは絶対に見習わないように。ライカ、これが最

後の弾倉^{マガジン}です！」

「サンキュ！……理想の世界か。じゃあ、あいつ等も戻ってこれたりするのかな」

『でも出来れば、自分勝手なだけじゃなくて、少しでも優しい世界を願ってほしい』

「優しい世界ね……タカチホさん、無事に帰ってきて。ケンタ、あんた達も祈りなさい！
せつかく教会の施設にいるんだから！」

スマイレの迫力に^お圧され、彼女の弟とその友人達は半ば強制的にツバキの無事を祈らされた。

『そしたらきつと、ほんの少しかもしれないけど、明日はちょっとだけ良くなるよ！』

戦場と、そうでない場所。

〈機獣少女〉と、そうでない者。

全員ではないが、『声』は大勢に届いた。

多くの者の願いと祈り、妄想と願望と理想によって世界は形作られる。

そして新たな世界が始まる――

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『ゾイヤミ』第四十七話をお届け致します。

前話の掲載が去年の十一月なので、約一年かかってしまいました。

今回は八月の後半を費やしてエピログまでの初稿を書き、二週間くらい寝かせ、推敲は一日で済みました。

本格的なあとがきはエピログに回し、今回はこんなところで早めに締めます。

良きところで謝辞を。

まずはいつもの紙白さんに感謝を。ラインハイト・ライセンの命名、ありがとうございます。劇中で使えて満足です。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。

次回のエピログにて完結です。

最後まで、お付き合いください。

2021/9/15 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ソイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第3部』小説ページに戻る